

現代の武州御嶽山における御師の技能習得と信仰 －太々神楽に注目して－

小林 直輝（筑波大学大学院生）

本発表では、武州御嶽山の太々神楽がどのように伝承されているのか分析する。この分析を進める問題関心は、以下のように位置づけられる。近年、民俗学における信仰の研究は、生活者の信仰に焦点を当て、その内面を捉るために、語りや対話からアプローチする手法を編み出しながら進められてきた。しかし、生活者の信仰を支える一方で、自身も生活者としての側面を持つ職業的宗教者の信仰の現代的様相はほとんど看過されてきた。以上の問題関心を背景に、本発表においては、現代における武州御嶽山の御師が、御師としての技能をいかに習得するのか、また習得を通じていかに御師集団内に自身を位置づけるのか考察し、職業的宗教者における信仰の内面を明らかにする端緒としたい。

武州御嶽山は、武藏御嶽神社を拠点として豊作、火除け、盜難除けなどの内容をもって首都圏を中心に信仰されている。御師は近世以来続く御師家の人間が世襲し、現在 31 戸の御師家が各地に形成された講と師檀関係を結び活動している。御師に必要な技能・知識は、各御師家、教育機関、御師集団が支える武藏御嶽神社など様々な次元で習得され、その過程で御師は宗教者として自立し、かつ自身の内面的な信仰は構築される。本発表では御師としての技能・知識の体系を個人がいかに構築するのか、個々の御師のライフコースと関連づけて概観し、御師集団内で伝承される技能として太々神楽に特に注目して分析していく。

太々神楽は御師集団によって江戸時代中期以降伝承されており、1957 年には東京都無形民俗文化財に指定されている。太々神楽の奏上は講にとって最も格式の高い参拝方法とされるが、講の衰退、減少とともに奏上件数は減少している。一方で武藏御嶽神社や観光協会が主催する太々神楽の一般公開の実施日は増加しており、武州御嶽山における観光資源としての役割は増している。

太々神楽を取り巻くこのような変化により、伝承の形態と内容の双方が変化している。奏上機会が減少し、それに伴い楽屋での指導機会も減少した現在、毎年 3 月に 3 日間武藏御嶽神社が主催する神楽講習会が太々神楽の伝承に大きな役割を果たしている。講習会では若手の御師が基本的な演目を教わるだけでなく、近年は奏上機会の減少を背景に舞手が少なくなっている演目を中堅の御師が集中的に教わる形が認められる。豊富な奏上機会に支えられた、各御師が得意とする演目を極めていく方向から、現存する 16 座の神楽を継承する方法に変化している。

太々神楽伝承の場からは、御師集団と各御師の関係性の特徴が読み取れる。特定の演目に秀でた御師が強い発言権を持って教えていた講習会は、ベテランの御師を中心としながら複数の御師が所作について確認し合う形態へ変化している。所作について指導する御師の間で意見が食い違う場合には、教わる御師は所作の選択の主体的な判断を求められる。さらに個人の解釈に基づいた所作の改変も試みられ、各御師の主体性が認められる範囲が確保されている。

以上の太々神楽の伝承に関する事例を踏まえ、御師としての技能の習得と、習得を通じた御師集団との関係構築の現代におけるあり方を関連づけ、御師という職業的宗教者の信仰の内面へ迫る端緒とし、武州御嶽山信仰の動態への考察の展望を示したい。